

『夕陽 (09/02)』

空は神が描く
絵画なのでしようね
青い空とかモクモク雲とか
赤い夕陽と紫の嶺線とか
壮大な夕空キャンバスへ
神は一心に描いており
私は空のキャンバスを
陽が沈むまで
夕刻のとぼちりが下りるまで
じっとじっと見つめています

夕陽に白雲は紅に映え
真っ赤な青い空は高く
私の夢と幸福が
吸込まれそうです
いや私が風船のように
放つのかも
高く高く天まで届けって
願いの糸を心に結んで
黄昏の空へ飛ばすのが
たった一つの私の喜びなのです

空は神が描く
絵画なのでしようね
大空を希望と郷愁に染めて
ゆっくりゆっくり太陽は
沈んでいきます
鳥はその中を時(ねぐら)に
飛んで渡っていきます
夕陽の空の情景って
私が一番憩う時なのです
真っ赤な空に見惚れて

『夜雨(やしゅう) (09/02)』

夜に落ちる涙の雨は
愛しい人の哀しい涙
男の部屋へと叩く音
逢えない想い怨み涙
女の性(さが)の哀れ叫び音
夜に落ちる雨の涙は
愛しい人への想い雨
男は部屋で耐える音
幸せ願い噎(むせ)び泣き雨
男の哀れ叫び斬る音

夜に落ちる涙の雨は
男と女の哀しい心涙
女と男の哀れな心音
凡て流せと諦めの雨
男と女が情(じょう)を別ける音

『朝の太陽 (09/09)』

朝靄の中を太陽は
オレンジに燃えて昇っている

遠く野畑は白い霧がたちこめ
送電鉄塔や新幹線の高架も
まだモノクロトーンの中を

朝の太陽はオレンジ色に
燃えて昇っている

ぐいぐいぐいと
ぐんぐんぐんと
真っ赤に燃えて昇っている

昼の太陽は真上にあつて
ギラギラと燃え盛(さか)り

凡(すべて)てをカラカラにし
凡(あら)ゆる物から潤いを蒸発させて
地上の樂園を地獄化することく

昼の太陽は勺熱の熱風を
吹き放つて燃えている

ギラギラとギラギラと
ぎらぎらとぎらぎらと
天の真上で燃え盛っている

空を黒雲を白雲を真っ赤に染めて
夕陽の太陽は沈もうとしている

海は万感の黄金に輝かせ
凡ゆる風景を刻々と千変万化させ

地上を樂園に戻しながら

夕陽の太陽は地平線の彼方から
空を真っ赤に焦がして沈んで行く

太陽は昇り日が始まり
太陽は沈み日が終わる
陽は昇り陽は沈み陽は昇り陽は沈む

『遠く』(09/09)『
涙目で見つめる先は
遠く遠く私にはわからない

哀しい瞳に涙を溜めて
あなたは心の痛みを耐えようと

遠く遠くを見つめている

涙目で見ている先へ
私も同じように視線を向けるが

男の視線はいたずらに虚を走り
時間が過ぎるのを待っている

遠く遠くを互いに見つめながら

女は泣いて涙を流し
男はただじっと待っている

『音』(09/14)『

カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
朝方また聞こえてきた
いつごろかは知らないが

石を削る音がしている

カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
昼になると止んで
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン

石を削る音がしている

カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
一心に願いを込めて
一心に祈って
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン

夕方近くになると
突然音がしなくなるんです

カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン
墓石は多分もう少いで
出来上がるのでしょうか

カッキーンカッチーン
カッキーンカッチーン

『秋 (09/14)』

曇りの空の中を
ただ一羽
鳥が飛んでいる
鉛の鈍い光沢の中を
羽根を動かし続け
何処へ行こうとするのか
私の心には希望もない

夏の出来事を包むような
鉛の空は索漠(さくぼく)と広がり
鳥は滑降すると見せて
再び羽根を上下し
樹木の上をビルの上を
転回し飛んでいる
何処へ目的を定めて
飛んで行こうというのか
まさか！ 私の心へでは
あろうはずもないのに

静かな樹の上空は
静かな町の上空は
鉛色の光沢が
重く垂れ下がり
その中を鳥が一羽
飛んでいる飛んでいる
私の心には希望すらもない

『夜 (09/17)』

石畳の道の上を
霧雨が濡らし
男と女がコツコツと

音を発てて歩いている

喋ることもなく

男は疲れたように

女はしかたがないように

互いに傘をさして

石畳の道を歩いて行く

霧雨の中を歩いている

店の閉じた遊歩道は

濡れた石畳の道は

外灯に照されている

男と女が歩いている

『雨
(09/17)』

街は日曜日です

街に雨が降っています

普段と違って

往来する人もなく

雨だけが

しとしと落ちています

昼がなんともなく過ぎ

時計は夕方六時をさし

夏の明るかった街は

この時刻に秋が忍び寄る

うす紫の夕暮れです

灯りが恋しい黄昏です

秋口の雨って

もの寂しいですね

せつなく悲しいですね

子供の頃の郷愁が

街に匂っていきそうでね

失恋の心の中へね

『秋曇り
(09/22)』

空はどんより曇りです

走っている電線には鳥の

姿もおりません

燕の姿も見かけなくなりました

黒・青・赤の瓦屋根や

樹木やビルの建造物が

目に入ってくるのですが

音が何も聞こえないのです

凡てが動きが停止してしまった

時間が止まったように

時間がなくなつたように

感じ取れ取れてくるんです

外は肌寒くなりました

生きるって悲しいですね

生きるって寂しいですね

季節はもう秋ですね

季節はもう秋なのです

遠くの踏切のチンチンの音が

やっと聞こえてきました

微風に枝が揺れだしました

やっと動きも見えだしました

一人って淋しいですね

一人って哀しいですね

季節はもう秋なのです

『想い
(09/22)』

いま私は生きています

いま私は起きている

いま私は食べています

いま私は歩いている

いま私は書いています
いま私は話している
いったい
これって何なのでしょう

どうして人は生きているの
どうして人は寝て起きるの
どうして人は食事をするの
どうして人は歩いているの
どうして人は仕事をするの
どうして人は喧嘩をするの
いったい
これって何なのでしょう

いま私は話している
いま私は書いています
いま私は歩いている
いま私は食べている
いま私は眠っている
いま私は生きている
いったい
これって何なのでしょう

『落ちる雨 (09/24)』

女は顔を真っ青にし
男も顔を白づかせ
互いに無口で
男も女も哀れです

秋の雨は寒いです
夢を冷ませ
男も女も昔を思い
まだ恋しいあの時を

女は人生に醒め
男はなすがままに
女は夕食を用意し
男も女も悲しいです

『残り雨 (09/24)』

男と女は悲しいです
男は夢をなくし
女は未来をなくし

男と女は哀れです

秋雨は淋しいです
夢をなくした男と
明日をなくした女と
抱いて夜過ごす

男も女も哀れです
男は無口で明日を見る
女は無口で諦める
男も女も悲しいです